

入学者選抜^{*1}

尾 島 昭 次^{*2} 橋 本 信 也^{*3} 桜 井 勇^{*4}

概 要

本白書の対象期間である1986～1990年は本邦の入学者選抜にとって大きな変動の時期であったといえる。

1) 制度の変容

1979年に始った国・公立大学共通第1次学力試験が11回実施された後、1990年から大学入試センター試験（以下，“セ試”）に引きつがれ、私立大学へも開放され、かつ利活用が弾力化された。それに先立ち、1987年より国・公立大学においては、受験者側の要望に応え、**受験機会の複数化**に踏み切ったが、A・B日程、連続、分離・分割、事前・事後選択、二次募集（定員留保の有・無）、いわゆる足切りなど、手続き的には、受験者側のみならず大学側もその対応に振り廻される程に複雑な様相を呈するに至っている。

2) 選抜方法の多様化

国・公立大学における**試験教科数の減少**、**面接・小論文の増加**、**推薦入学の急増**など、多様な方法によって、**学力以外の適性も評価**しようとの意識が浸透してきたと見られる。国・公立の中で、第2次（個別大学）試験での学力検査廃止大学が筑波・佐賀に加え信州・宮崎の4校となり、分離分割方式のマイナー部分での学力検査抜き面接・小論文パターン校の増加（旧帝大も含む）も含めると、日本医学教育学会提言¹⁾の方向へより大きく動いた時期、つまり第2の同提言受容期と

もいえる。

またこの時期に、それまで福岡大学医学部のみが採用していた skills analysis test²⁾（米国の new MCAT=Medical College Admission Test の一部）への関心が高まり、89年より信州大学医学部がそれを採用し、またその研究のために医学教育振興財団ならびに文部省の特定研究班が組織され活動していることも、学力以外の適性評価の重要性への認識が深まった現れである。私立大学における選抜方法は、以前より全大学が多面的方法を採用していたので、この時期に特記すべきことはないがセ試に慶応大学医学部が初参加したことは注目される。

3) 入学定員の削減

医師不足の社会的ニーズに応じて1970年から医学校が急造され、それまで長らく43校であったのが、一躍80校となり、入学者もほぼ倍増した³⁾。その結果は15年を経て医師過剰時代を招来し、1995年に新参入医師数を10%減らす目標が立てられ、1985年に愛媛大が初めて20名の定員減を断行した³⁾。つまりこの白書の対象年限は国立大の定員減、私立大の定員厳守ないし減に政策が180度転換した時期に相当する。

以上の3点が、この白書の対象期間における入学者選抜について特筆すべきことと思われるが、そのほか倍率の変動、女子医学生の急増、外国人留学生の受入れなど社会情勢を反映した変化も勿論見られる。以下に若干のコメントとともにその実態を記す。

1. 制度の変革（表1）

1) 共通テストの変容

1990年から共通1次試験がセ試となり、私大が参加できるようになったが、初年度は医学系では

^{*1} Student Selection.

キーワード：選抜制度・入学定員倍率・選抜方法・入学者

^{*2} OJIMA, Akitsugu 岐阜大学医学部病理学教室

^{*3} HASHIMOTO, Nobuya 東京慈恵会医科大学内科学教室

^{*4} SAKURAI, Isamu 日本大学医学部病理学教室

表 1 制度の変化（共通試験・受験機会）⁴⁾

	1986				1987				1988				1989				1990			
共通テスト	共通第1次学力試験（国・公立大＋産業医大）												セ試（国・公立大＋私大自由参加）							
国 語	1/1	100分	200点		（解答 科目数）	1/1	（出 題 科目数）	100分	200点				1/1	80分	100点					
社 会	2/6	120	200			1/5		60	100				1/5	60	100					
数 学	1/2	100	200			1/3		100	200				A1/1	60	100					
													B1/3	60	100					
理 科	2/4	120	200			1/5		60	100				A1/2	60	100					
													B1/2	60	100					
													C1/2	60	100					
外国語	1/4	100	200			1/3		100	200				1/3	80	200					
	7科目	9時間	1000点			5科目	7時間	800点					利活用自由化							
受験機会	国立1回				国公立計2回（除一部公立）				国立2回，1回（前期合格者）											
2月末 3月上旬 3月中旬 3月20日頃					連続 { A日程（国公立） { B日程（国公立） 一部公立 A，B，公立合格者発表				連続 { A（国公立） { B（国公立） C日程（公立） 前期発表 後期（国公立） A，B，C，後期合格者発表											
共通1次試験 ⁴⁾												センター試験 ⁴⁾								
主として，高等学校の段階における一般的かつ基礎的な学習の達成の程度を判定することを目的とする。												各国公私立大学の自由な利活用に委ねるとともに，それぞれの判断と創意工夫に基づき，入学志願者の高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的とする。								

慶応大学のみであった。かつその利活用が自由化され、各大学の裁量にゆだねられた。同時に実施細目にも変化が見られるが、問題のレベルは共通1次のそれを維持し、質は一層よくなるとのことである。国公立大学は共通1次の延長と受けとめ、推薦入学の一部を除き、これを課すことで合意している。

因みにこれら両テストの目的は上記のように謳われている⁴⁾。

2) 受験機会の複数化

1987年度に、受験機会が国立1回から、一部公立を除き国・公立併せて2回（A・B日程いずれにも出願し、いずれかに入学）に複数化された。連続とは、A，B日程の合格者発表を同時に行なうため、大学によっては、合格者が大幅に抜け（反対の期の大学に入学）、質・量ともに確保が困

難となり、入試事務もきわめて煩雑化した。そこで89年度より連続方式に加え、分離分割方式（前期日程合格者を発表後に後期日程の試験を実施、前期入学手続者は後期を受験できない）が導入され、両制度併存制がスタートした。その結果、分離分割方式に踏み切る大学が急速に増し、かつ前期に入学定員の80～90%をあてる大学が多いため、A日程＋分離分割前期の定員とB日程＋後期の定員の間に不均衡が生じ、また実質的に1回受験に近くなるという新たな問題がクローズアップされてきた。

2. 医学校数ならびに入学定員（表2-1，2）

一県一医大のスローガンのもとに、1970年より医大新設が始まり、それ迄長年46校4,040名が、12年間で80校、8,360名とほぼ倍増した。大学数

表 2-1 医学校数と入学定員の変遷^{3,4)}

年度	大学数	入学定員	対前年増減	年度	大学数	入学定員	対前年増減
1969	46	4,040	0	1980	79	8,260	+ 300
70	50	4,380	340	81	80	8,360	+ 100
71	52	4,720	+ 340	82	80	8,360	0
72	59	5,600	+ 880	83	80	8,360	0
73	62	6,200	+ 600	84	80	8,360	0
74	69	6,920	+ 720	85	80	8,340	- 20
75	70	7,120	+ 200	86	80	8,300	- 40
76	72	7,420	+ 300	87	80	8,240	- 60
77	72	7,480	+ 60	88	80	8,125	- 115
78	76	7,900	+ 420	89	80	7,880	- 245
79	76	7,960	+ 60	90	80	7,815	- 65

注：1974年度以降に防衛医大の 80 名（1988 年から 65 名）を含み、また 1975 年度から大阪大の専門課程での 20 名（1990 年から 10 名）増を含む。

表 2-2 医学校入学定員減の内訳⁵⁾

年度	国 立	公 立	私 立	減数計
1985	愛媛 (20) -20			- 20
1986	福島・長崎 (各20) -40			- 40
1987	千葉・鳥取・鹿児島 (各20) -60			- 60
1988	山形・金沢・山口・熊本 (各20), 防衛 (15) -95		杏林・東海 (各10) -20	-115
1989	旭川・東北・新潟・岡山・九州・ 弘前・神戸・広島 (各20) -160		帝京 (20), 近畿 (5), 日大, 東京, 慈恵, 昭和, 久留米, 川崎 (各10) -85	-245
1990	大阪 (20), 富山・島根・香川・ 愛媛・高知・佐賀・大分 (各5) -55		北里 (10) -10	- 65
計	26校 -430		11校 -115	37校 -545

にその後変動はないが、入学定員は、4 年間の横這いの後、1985 年より減少期に入った。1985 年の愛媛医大の 20 名減を皮切りに、国立大から定員減が始まり、ついで私立大も参加、その年次推移を表 2-1, 2 に示す。公立大は元来少なかったので変動は全く見られない。

1990 年 4 月現在で、北大・京大を除き国立は 100 名：31, 95 名：7, 80 名：2, 公立は 100 名：3, 80 名：3, 60 名：2, 私立は 110 名：7, 100 名：18, 95：1, 90 名：2, 80 名：1 の分布となった。ピーク時の 8,360 名から 6 年間で 545 (6.5%) 減じている。

3. 倍 率 (図 1)

共通 1 次元年の 1979 年に国・公立大学の倍率が急降下し、1985 年にいずれも平均約 3.5 倍に落ちついた⁶⁾。本白書の対象期間内に、受験機会の複数化 (1987 年より) が復活したので、志願倍率は国立で平均 6～7 倍となったが、分割方式 (前期の合格発表後、後期試験実施制) の導入 (1989 年) により実質倍率 (受験者数/合格者数) は低下したと推定される。

一方、私立医大についてみると、表 3-1 に示すように、1986 年の志願者数は 23,631 名であったが、年とともに増加し、1990 年には 4 万人を越え

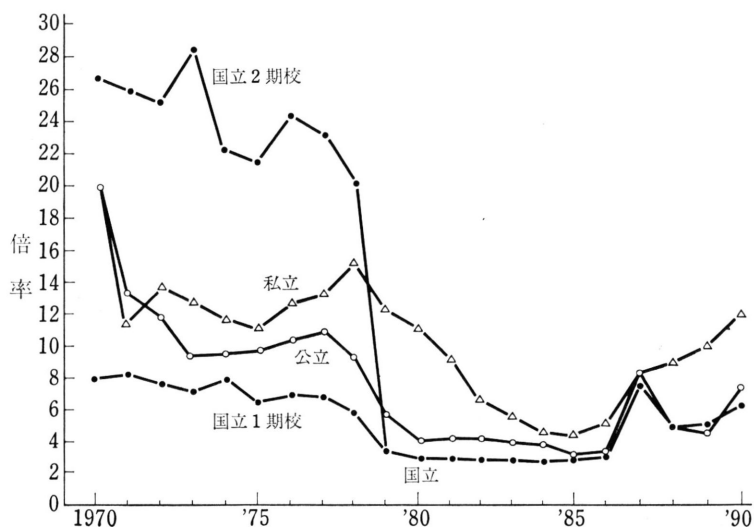
図1 医学校における入学者選抜倍率の年次推移⁶⁾

表 3-1 私立医大の年度別志願者・受験者・入学者

年度	志願者数	受験者数	入学者数	募集人員数
1986	23,631	21,986	3,068	3,040
1987	25,026	22,821	3,114	3,040
1988	30,188	27,358	3,074	3,020
1989	34,897	31,848	2,939	2,935
1990	41,048	36,567	2,948	2,925

(私立医大協会資料)

表 3-2 私立医大の年度別受験者数・合格者数・入学者数⁵⁾

	定員	受験者数	合格者数	倍率	入学者数	オーバー数
1986	3,040	不明	不明	—	3,068	+28
1987	3,040	不明	不明	—	3,114	+74
1988	3,020	27,953	4,113	6.80	3,074	+54
1989	2,935	32,399	3,899	8.30	2,948	+13

表 3-3 医学校倍率の設置別推移 (1986~1990)⁵⁾

年 度			1986年			1987年		
設置区分	n		最高～最低	平 均	対 定 員 入学者数	最高～最低	平 均	対 定 員 入学者数
国 立	戦 前	13	4.1～1.7	2.6	+19	11.0～4.5	6.4	+36
	戦 後*1	12	4.9～1.7	3.0	+7	13.0～4.8	8.3	+12
	新 設*2	17	4.3～1.6	3.0	+21	12.9～5.1	8.4	+32
	計	29	4.9～1.6	2.9	+47	13.0～4.5	7.8	+80
公 立		8	5.8～2.6	3.6	+17	14.8～5.7	8.3	+41
防衛医科大学校			定員80名	倍率不明	— 8	定員80名	倍率不明	— 2

るようになった。実際の受験者は志願者数より減少しているのは当然としても、1986年には21,986であったものが、1990年には36,567人が私立医大を受験している。この表3-1は私立医大協会の資料によるものであり、これには合格者数が記され

ていないので、実質倍率(受験者数/合格者数)は不明である。しかし、受験者数は年々増加していることは確実であり、一方で入学者定員の削減が行われているのであるから、倍率が高くなっていくことは想像に難くない。

表 3-4 医学校倍率の設置別推移 (1988~1990)⁵⁾

設置区分		1988年			1989年			1990年 ^{*3}	
		最高～最低	平均	対 定 員 入学者数	最高～最低	平均	対 定 員 入学者数	最高～最低	平 均
国立	戦 前 13	5.5～2.4	3.9	+18	5.4～2.9 (17.9)	4.2 (17.9, 分分2校)	+27	8.7～3.4 (29.0～7.2)	4.8 (16.2, 分分8校)
	戦 後 12	14.2～2.1	5.1	+15	16.0～3.4 (10.6～6.7)	5.9 (8.7, 分分2校)	+ 2	11.1～4.0 (13.8～5.0)	6.8 (9.6, 分分5校)
	新 設 17	6.8～2.8	4.5	+ 4	7.0～2.8	4.4	+10	12.8～4.2 (7.5～5.2)	7.1 (6.4, 分分2校)
	計 42	14.2～2.1	4.5	±37	16.0～2.8 (17.9～6.7)	4.8 (13.0)	+41	12.8～3.4 (2.9～5.0)	6.3 (10.7)
公立 8		8.7～2.9	4.8	± 0	7.3～3.8	4.5	+ 7	11.6～3.9	7.6 (分分なし)
私立	戦 前 13	19.2～2.9	9.8	+ 7	19.3～4.1	11.0	−30	—	—
	新 設 16	9.9～2.8	5.4	+59	11.6～4.2	7.0	− 4	—	—
	計 29	19.2～2.8	7.6	+54	19.3～4.1	9.0	+13	—	—
防衛医大		(定員 65)	54	± 0	(定員 65)	51	+ 1		

*1: 国立戦後: 昭和44年以前に設立または移管

*2: 新 設: 昭和45年以後に設立

*3: 90/2/1 の新聞による。倍率が志願者数: 入学定員で示してあるので, 86~89年の受験者: 合格者の約1.5倍と推定される。分分: 分離分割の略記

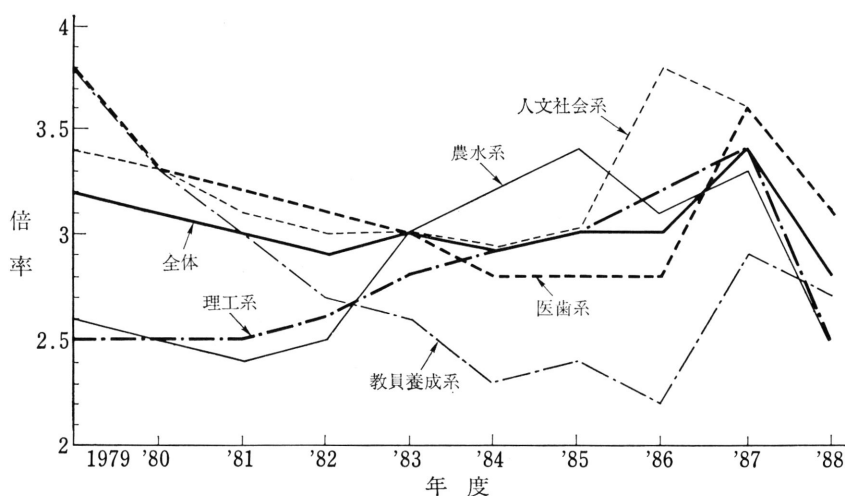


図 2 国立大学各系志願倍率の推移⁷⁾

合格者数については, “医学教育カリキュラムの現状” (平成元年度版)⁵⁾ には記載されているので, これを表 3-2 に示すが, 1988年には, 27,953 人の受験者に対し, 合格者は 4,113 名であるから

実質倍率は, 6.8 倍であったが, 1989年には実質倍率8.3 倍と急増している。

1990年の志願者数, 受験者数は, ちょうど昭和55年 (1980年) 頃と同じであるが, そのときの入

表 4-1 国・公立医学校の入学者選抜方法

項 目		定 員		日 程		二段階選抜基準		推薦入学		帰国子女		国 語	
年 度		'89	'90	'89	'90	'89	'90	'89	'90	'89	'90	'89	'90
戦前国立 (13)	北海道	120	108 12	B	前期 後期	4倍	10倍	—	—	○	○	—	—
	東 北	120	85 15	B	前後	3.5	4 5	—	—	○	○	—	—
	千 葉	100	85 15	B	前後	4	4 3	—	—	—	—	—	—
	新 潟	120	100	B	A	—	—	—	○'90	—	—	—	—
	東 京	90	80 10	B	前後	4	4 5	—	—	○	○	I・II	I・II 総合
	名古屋	100	100	A	A	3	3	○'87	○	—	—	—	—
	金 沢	100	100	A	A	—	—	—	—	—	—	—	—
	京 都	110 10	110 10	A 後	前後	4 6	4 6	—	—	—	—	I・II	I・II
	大 阪	90 10	90 10	A 後	前後	4 15	4 15	—	—	—	—	—	—
	岡 山	120	80 20	A	前後	5	5 5	—	—	—	—	—	—
	九 州	120	90 10	A	前後	4	4 10	—	—	○	○	—	—
	長 崎	100	100	A	A	—	—	—	○'90	—	—	—	—
	熊 本	100	100	B	B	—	—	—	○'90	—	—	—	—
戦後国立 (12)	弘 前	120	90 10	A	前期 後期	>560/800 点	>560/800 10	—	—	—	—	—	—
	群 馬	100	65 35	A	前後	—	—	○'87	○	—	—	—	—
	信 州	100	100	A	A	5	5	—	○'90	—	—	—	—
	東医歯	80	80	B	B	5.5	8	—	—	—	—	—	—
	岐 阜	80	80	A	A	8	8	—	○'90	—	—	—	—
	三 重	100	100	B	B	—	—	○'89	○	—	—	—	—
	神 戸	100 20	80 20	A 後	前後	—	4.5 5.0	—	—	—	—	—	—
	広 島	100 20	80 20	A 後	前後	5 5	5 5	—	—	—	—	—	—
	鳥 取	100	90 10	A	前後	—	— 7	○'87	○	—	—	—	—
	山 口	100	100	A	A	5	5	○'87	○	—	—	—	—
	徳 島	120	80 20	A	前後	—	5	—	—	—	—	—	—
	鹿児島	100	100	B	B	—	5	—	—	—	—	—	—

学者数は3,198名(定員3,040名)であり、本年は2,948名(定員2,925名)であるから、倍率としては本年の方が高いことになる。

注目すべきことは、合格者数に対する入学者数である。1988年には4,113名の合格者に対し、実際に入学した者は3,074名であるから、約1,000名余計に合格発表をしていることになる。大学別の記載は省略するが、ある大学では238名の合格者

数に対し、入学者は120名である⁵⁾。これは受験生がかけ持ち受験をして、合格しても他の大学へ入学してしまうことを予想して、あらかじめ多数の合格者を発表しているためかもしれない。

さらに注意をひくのは、入学者数が定員を上回っていることである。1986年には28名がオーバーしているが、1987年には74名、1988年には54名と大幅に定員過剰で入学を許可していることであ

(1989と1990の比較)……(1)

外国語		数 字		理 科		小論文		面 接		セ 試/個大試配点	
'89	'90	'89	'90	'89	'90	'89	'90	'90	'90	'89	'90
外 1	外 1 総合	5	5 総合	物+1/化・生	物+1/化・生	—	—	—	—	17 : 19	17 : 19 0 : 250
外 1	外 1 英・B C	4	4 —	2/3	2/3 1/3	—	—	—	—	5 : 6	5 : 6 3 : 4
外 1	外 1 —	4	—	2/3	1/3 —	○	○ ○	—	—	8 : 9	2 : 1 2 : 1
英・B C	英・B C	4	4	1/物・化	—	○	—	—	—	8 : 7	11 : 7
外 1 ヒアリング	外1 ヒアリング 総合	5	5 総合	2/4	2/4 化・生	—	—	—	—	1 : 4	1 : 4 総判
外 1	外 1	4	4	2/3	2/3	—	—	○	○	1 : 1	2 : 3
外 1	外 1	5	5	物・化	物・化	—	—	—	—	1 : 1.5	2 : 3
外 1	外 1	5	5	2/3	2/3	—	—	—	—	1 : 4	1 : 4
外 1	外 1	5	5	2/3	2/3	—	—	—	—	2 : 3	2 : 3
外 1	外 1	4	4	2/3	2/3	—	—	—	—	4 : 3	4 : 3
外 1	外 1	4	4	2/3	2/3	—	—	—	—	2 : 3	2 : 3
外 1	外 1	4	4	2/3	2/3	—	—	—	—	4 : 7	4 : 7
英・B C	英・B C	4	1/数理6	2/3	1/数理 6	—	—	—	—	4 : 3	9:4+面
英 I・B	英 I・B	4	4	2/3	1/3	—	—	—	—	2 : 3	2 : 3
外 1	—	3	3	2/3	2/3	—	—	○	○	8 : 7	8 : 7
英 I・B C	英 I・B C	4	4	—	—	○	○	○	○	1.5 : 1	1.5 : 1
—	—	—	—	—	—	○	○	○	○	800 段階評	900 段階評
外 1	—	4	4	2/3	—	—	○'90	○'89	○	1 : 1	1 : 1
英・B	英・B	4	4	2/3	—	○	○	○	○	1 : 1.5	1 : 1
英・B	英・B	4	4	2/3	2/3	—	—	—	—	9 : 5.5	5 : 6
外 1	外 1	4	4	2/4	2/4	—	—	—	—	15 : 17	15 : 17
外 1	外 1	4	4	—	—	○	○	—	—	1 : 1	1 : 1
外 1	外 1	4	4	物	物・化	—	—	—	—	8 : 11	6 : 5
英・B C	英・B C	3	3	—	—	○	○	—	—	800+面	800+面
英 I・B C	—	3	3	1/3	1/3	—	—	○	○	16 : 9	16 : 9
英・B C	英・B C	3	3	2/3	—	—	—	—	—	8 : 6	5 : 4
英・B C	英・B C	3	3	1/3	—	—	—	—	—	7割を1:1 3割を1:5	7 : 4 1 : 1
英・B C	英・B C	3	3	1/3	—	—	—	—	—	1 : 1	3 : 2

る。

1) 倍率の設置別年次推移 (表 3-3, 3-4)

国立(3群), 公立, 私立(2群)に分け, 対象年度の推移を表 3-3, 3-4 に示す。1986~89 年は“カリキュラムの現状”⁵⁾をもとに, 各大学の記入による受験者数/合格者数で算出したが, 1990 年に関しては新聞の志願者数/定員によったので, 1990 年は受験者数/合格者数の1.5倍前後を示して

いると推測される。しかし1990年の各群間の比較は可能である。国・公立については86年の2.8と3.6が, 受験機会が複数化された87年に7.6と8.3と, 倍以上に増加した。しかし88年には, 4.4, 4.8と低下し, 89年, 90年(換算すれば)も横這である。分離分割方式の導入により見かけ上の高倍率が受験機会が1回であった86年の1.5倍前後に落ち着きつつある。公立は国立よりやや高い傾

表 4-2 国・公立医学校の入学者選抜方法

項 目		定 員		日 程		二段階選抜		推薦入学		帰国子女		国 語	
年 度		'89	'90	'89	'90	'89	'90	'89	'90	'89	'90	'89	'90'
新国立 (17)	旭川	120	100	A	B	5	5	—	—	—	○	—	—
	秋田	100	100	A	B	5	5	○'87	○	—	—	—	—
	山形	100	100	A	A	4	4	—	○'90	—	—	—	—
	筑波	100	100	B	B	8	8	—	—	○	○	—	—
	山梨	100	60 20	B	前期 後期	5	5 10	—	○'90	○	○	—	—
	浜松	100	100	B	A	6	5	○'89	○	—	—	—	—
	富山	100	100	A	A	—	6	—	—	—	—	—	—
	福井	100	100	B	B	8	8	○'89	○	—	—	—	—
	滋賀	100	100	B	B	7	7	○'87	○	—	—	—	—
	島根	100	100	A	A	6	>75%	○'87	○	—	—	—	—
	香川	100	100	B	B	—	—	○'85	○	—	—	—	—
	愛媛	100	100	B	B	—	7	○'87	○	—	—	—	—
	高知	100	100	B	B	>75%	>75%	○'85	○	○	○	—	—
	佐賀	100	100	A	A	>75%	>75%	○'85	○	—	—	—	—
	大分	100	50 50	B	前後	7	— 7	—	—	—	—	—	—
	宮崎	100	100	A	A	—	5	○'87	○	—	—	—	—
	琉球	100	100	B	B	—	—	○'87	○	—	—	—	—
公立 (8)	札幌	100	100	B	A	4	4	—	—	—	—	—	—
	福島	80	80	B	A	4	5	—	—	—	—	—	—
	横浜	60	60	A	A	800人	800人	—	—	—	—	—	—
	名古屋	80	80	B	B	—	—	—	—	—	—	—	—
	京都	100	100	A	A	4.5	4.5	—	—	—	—	—	—
	大阪	80	80	A	A	4	4	—	—	—	—	—	—
	奈良	100	100	A	A	10	10	—	—	—	—	—	—
	和歌山	60	60	B	B	5	5~6	—	—	—	—	—	—

向は続いている。ここで注目すべき高倍率は、分割後期、とくに戦前立大学のそれである。

入学定員に対する入学者数は、全国立で見ると、86年から+47, +80, +37, +41と推移し、受験機会の複数化導入により、入学定員の調節がやや困難のようである。90年から外国人を除く日本人入学者数の定員厳守が指示されているので、90年は定員に近づくことであろう。

2) 倍率—医学以外の領域との比較

図2に各系の志願倍率の共1元年より10年間の比較を示す⁷⁾。歯学を含んでいるので、図1よりも若干高い。また87, 88年は受験機会の複数化したので、実倍率の1/2で示してある。

1979年国・公立医歯系は国・公立の全体に比し、かなり高かったが、次第に下降し、83年に交

又し、この白書の対象年の始めまで、全体平均より低くなった。その原因として、急速な医大増が考えられる。医学部人気下降も巷間いわれているが、87~88年に再び平均より高くなったので、その辺りは、もう少し長期的に見る必要がある。なお理工系ならびに農水系と鏡像を呈し、人文社会系と類似の傾向を示しているのは興味深い現象である。

4. 選抜方法

選抜日程なども含め、広義の選抜方法の89年と90年度分⁴⁾を、倍率の項と同様、国・公立について、設置区分別、大学別に表4-1, 2に示す。先にものべたように、90年度からセ試が共通1次試験にとって変わり、また87年からの連続方式に、分

(1989と1990の比較)……(2)⁴⁾

外国語		数 学		理 科		小論文		面 接		セ試/個大試配点	
'89	'90	'89	'90	'89	'90	'89	'90	'89	'90	'89	'90
英・B C	英・B C	2	1(微・積)	2/3	—	○	○	○	○	5: 4	2: 1
英・B C	英・B C	4	4	2/3	2/3	○	○	○	○	1: 1	1: 1
—	—	—	—	—	—	○	○	○	○	1: 1	9: 8
英・B	—	3	4	1/3	2/3	—	—	○	○	?	?
英Ⅱ・B C	英Ⅱ・Ⅱ B	4	3	2/3	2/3	○	○	○	○	5: 7	5: 12
英・B C	英・B C	2	2	—	—	○	○	—	—	18: 11	21: 11
英Ⅰ・B C	英Ⅰ・B C	4	4	—	—	—	—	○	○	1.5: 1	2: 1
英・B C	英・B C	4	4	2/3	2/3	—	—	○	○	7: 4	7: 4
英・B C	英・B C	3	3	—	—	○	○	○	○	10: 7	9: 7
—	—	1(微・積)	1(微・積)	—	—	○	○	○	○	7: 4	2: 1
—	—	2	2	物・化	物・化	○	○	○	○	6: 5	6: 5
英・B C	英・B C	2	2	物・化	—	—	—	○	○	8: 6	7: 4
—	—	—	—	—	—	○	○	○	○	?	?
英・B C	英・B C	3	3	—	—	—	—	○	○	?	?
英・B C	—	3	—	—	—	—	○	○'88	—	2: 1	総評
—	—	2	2	1/3	—	—	—	○	○	3: 2	3: 2
英・B C	英・B C	2	—	2/3	2/3	○	○	○'86	○	4: 3	7: 4
英・B C	英・B C	4	4	2/3	2/3	—	—	—	—	9: 13	9: 13
英・B C	英・B C	4	4	2/3	2/3	—	—	○	○	1: 1	1: 1
外 1	外 1	4	4	2/3	2/3	○	○	○	○	1: 1.5	1: 1.5
英・B C	英・B C	4	4	2	2/3	—	—	—	—	4: 5	9: 11
英Ⅰ・B C	英Ⅰ・B C	5	5	2/3	2/3	—	—	○'88	○	4: 5	4: 5
外 1	外 1	5	5	2/3	2/3	—	—	○'87	○	1: 1	1: 1
英・B C	英・B C	4	4	2/3	2/3	—	—	—	—	8: 11	?
英・B C	英・B C	4	4	2/3	2/3	○	○	○	○	5: 6	5: 6

離分割方式を並存させることとなったため、各大学における個別試験（従前の第2次試験に相当、個試と略す）のあり方が大きく様変わりしつつある。表4-1, 2の各項目ごとに、現状を記す。

1) 定 員

すでに述べたように、120は北大と京大のみとなり、80が2校、残りは東大以外、90年度ですべて100となった。東大は専門移行時に理2から10を加え100となる。

2) 日 程 (表4-1, 2)

分離分割が新国立の2/17に比し、戦前国立で8/13、戦後国立で6/12と、一挙に過半数に達した。残る26校が連続A、B各13校ずつとなり、一見バランスをとっているようだが、分離分割校において宮崎医大(前期と後期各50名)を除き、前期

(連続A日程と同日)に8～9割が割り当てられているので、表4から算出すると、国立でA+前期2,513人、B+後期1,567人、公立でもAにシフトし、520人:140人となる。従って国・公立合算で、A+前期3,033人、B+後期1,707人と、入学定員が前半に片寄る状況となっている。

とくに戦前立大の定員のほとんどがA+前期に集中しているため、かつてのⅠ・Ⅱ期校時代類似の様相を呈し始めていることに注意を払う必要があると思われる。分離分割方式をとるなら、理想的には宮崎医大のように5:5、あるいは群馬大のようにせめて65:35位の分割が望まれる。90:10は受験者の歩留りを確保するための方便に根ざすもので、異なる方法によって異なる能力・適性を有する学生を採るという積極的試行であると見

表 4-3 私立医大の入学者

大 学	入 試																				
	外 語 国								国 語						数 学						
	英 語						選 択		国 語 Ⅰ	国 語 Ⅱ	国 語 表 現	現 代 文	古 典	科 目 配 点	数 学 Ⅰ	数 学 Ⅱ	代 数 幾 何	基 礎 解 析	微 分 積 分	確 率 統 計	科 目 配 点
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ A	Ⅱ B	Ⅱ C	科 目 配 点	独 語	仏 語													
岩 手	◎	◎				2 100	○								◎	○	○	○	○	○	2-3 100
日 大	◎	◎		◎		3 100									◎		◎		◎		3 100
日 本	◎	◎				2 300									◎		◎	◎	◎		4 300
東 邦		◎		◎	◎	3 150									◎		◎	◎	◎		4 100
東 京		◎		◎	◎	3 150	○								◎		◎	◎	◎	◎	5 150
東 女	◎	◎				2 100											◎		◎		2 100
慈 恵	◎	◎		◎	◎	4 100	○	○							◎		◎	◎	◎	◎	5 100
〈セ試〉 慶 應									◎				1								
〈個別〉		◎		◎	◎	3 200											◎	◎	◎	◎	4 200
昭 和	◎	◎		◎	◎	4 100											◎	◎	◎	◎	4 100
順天堂		◎		◎		2 100									◎		◎	◎	◎		4 100
大 阪		◎		◎	◎	3 200									◎		◎	◎	◎	◎	5 200
関 西	◎	◎		◎	◎	4 100									◎		◎	◎	◎	◎	5 100
久留米	◎	◎		◎		3 100									◎		◎	◎	◎		4 100
自 治		◎		◎	◎	3 85									◎		◎	◎	○	○	4 85
獨 協	◎	◎				2 150	○	○							○		○	○			(3) (100)
埼 玉	◎	◎				2 100									◎		◎	◎		◎	4 100
杏 林	◎	◎				2 100											◎	◎	◎		3 100
帝 京	○	○				(2) (100)			○	○				(3) (100)	○		○	○			(2) (100)

選抜方法（1990年）

科 目													小 面 論 接		備 考
社 会							理 科								
現 代 社 会	日 本 史	世 界 史	地 理	倫 理	政 治 経 済	科 目 配 点	理 科 I	物 理	化 学	生 物	地 学	科 目 配 点			
							*	○	○	○		2 200	◎	◎	数は数Ⅰ必須の他，6科目から各1題 出題し2題選.
								○	○	○		3 200	○	○	他に適性検査（全員に課す）あり.
							*	○	○	○		2 400	○ 120	○ 50	調10点. 2次は論・面の他に適性検査 あり.
							*	○	○	○		2 150	○	○	2次は論・面の他に適性テストあり.
							*	○	○	○		2 200	○	○	2次は論・面の他に適性テストあり. (除)＜確統＞推測.
							*	○	○	○		2 200	◎	○	数学は数Ⅰの知識を前提とする.
							*	○	○	○		2 200	○	○	配点は推定. (除)＜確統＞推測.
															配点は推定. ＜セ試＞の成績は参考扱い.
							*	○	○	○		2 200	○	○	
							*	○	○	○		2 200	○	○	配点は推定. (除)＜確統＞統計.
							*	○	○	○		2 200	○	○	
							*	○	○	○		2 200	○	○	(除)＜確統＞統計. 配点は推定.
							*	○	○	○		2 200	◎		
							*	○	○	○		2 200	◎	◎	
							*	○	○	○		2 170	○	○	2次は学科試験（1次に同じ），論・ 面・心理テスト・Hr. Dic あり.
							*	○	○	○		1～2 (100～ 200)	◎	○	数・物・化・生→2.
							*	○	○	○		2 200	○ 50	○	(除)＜確統＞統計.
							*	○	○	○		2 200	○ 100	○	
							*	○	○	○		(1～3) (100～ 200)		◎	英・国・数・物・化・生→3.

表 4-3

大 学	入 試																			
	外 国 語								国 語						数 学					
	英 語						選 択		国 語 I	国 語 II	国 語 表現	現 代 文 典	古 科 目 配 点	数 学 I	数 学 II	代 数 幾 何	基 礎 解 析	微 分 積 分	確 率 統 計	科 目 配 点
	I	II	II A	II B	II C	科 目 配 点	独 語	仏 語												
北 里	◎	◎		◎	◎	4 150								◎		◎	◎			3 150
聖マリ	◎	◎		◎	◎	4 100	○	○								◎		◎		2 100
東 海	◎	◎		◎	◎	4 150								◎		◎	◎	◎		4 100
金 沢	◎	◎				2 100								○		○	○			(3) (100)
藤 田	◎	◎		◎	◎	4 100								◎		◎	◎			3 100
愛 知	◎	◎				2 100										○	○			(2) (100)
近 畿	◎	◎				2 200								◎		◎	◎		◎	4 100
兵 庫	◎	◎				2 200								◎	◎					2 200
川 崎	◎	◎		◎	◎	4 100								◎		○	○			2 100
〈セ試〉 産 業 〈個別〉	◎					1 100	○	○	◎					1 100	◎	◎				2 100
	◎	◎		◎	◎	4 200								◎		◎	◎	◎	◎	5 200
福 岡	◎	◎		◎	○	3~4 100								◎	◎					2 100

入試科目 { ◎ : 必須
○ : 選択

小論文・面接 { ◎ : 受験者全員
○ : 学科試験合格者のみ

理科* : 理科 I を 1 科目として扱わない

るわけにはゆかず、今後の改善が期待される。
1991年には分離分割がさらに7校ふえ、国立の過半数となることが予告されている。

3) 二段階選抜

89年と90年との間に大差を認めない⁴⁾。予告していても実施しない大学が多い。

4) 推薦入学

表5-1に示すように、国立では86年の3校が90年に22校となり50%を越したが、公立は未だ0である。

推薦入学の国立大における設置区分による差を表4-1で見ると、戦前立4/13、30.8%、戦後立5/12、41.7%、新国立13/17、76.5%で、大学の古さと明らかに逆比例している。90年度における国立22大学の実施方法の概要⁴⁾は表6、7のようで、かなり多様であることが判る。

私立では表5-1のように1986年にすでに17校(58.6%)が推薦入学をとり入れており、1987年には1校追加され、さらに1990年には1校ふえて計19校、65.5%で行っていることになる。

つづき

科 目													小 面 論 接		備 考
社 会							理 科								
現 代 社 会	日 本 史	世 界 史	地 理	倫 理	政 治 経 済	科 目 配 点	理 科 I	物 理	化 学	生 物	地 学	科 目 配 点			
							*	○	○	○		2 200	○	○	<2次>は他に性格調査あり.
							*	○	○	○		2 200	○	○	2次は論・面の他に適性検査あり. 微積は基本的な内容を中心に出题.
							*	○	○	○		1 100	◎	◎	論は作文.
							*	○	○	○		1~2 100~ 200	◎	○	数・物・化・生→2. 配点は推定.
							*	○	○	○		2 200	○	○	学科試験合格者に論・面・適性検査.
							*	○	○	○		1~2 100~ 200	◎	○	数・物・化・生→2
							*	○	○	○		2 200	◎		簡単な身体機能検査あり. (除)<確統>統計.
							*	○	○	○		1 200	○ 100	○	(除)<数Ⅱ>電算・流れ図.
							*	○	○	○		2~3 100	◎	○	他に適性検査. 物・化・生各3題から5選, 各科目1題が理Ⅰの内容を含む. 論は作文.
○	○	○	○		○	1 100	*	○	○	○		1 100			
							*	○	○	○		2 200	○	○	<個別>の英語は Hr (50点) を含む.
							*	○	○	○		2 100		◎	他に適性検査 100 点あり(除)<数Ⅱ> 電算・流れ図.

その設置区分でみると、表 5-2 に示すように、ほとんどが新設校であり、新設校の 73.7% (14/19) は推薦入学制を採用している。これに対し、旧設校は 5 校、38.5% (5/13) に過ぎない。

5) 帰国子女特別入学 (表 5-1)

国立では、戦前立が 4/13 (30.8%), それについて新設 4/16 (25%) であるが、戦後立は、公立とともに 0 である。その理由はよく判らない。私立では慶応、東海大で帰国子女特別入学試験を行っているが、資料からではその詳細は不明である。

6) 個別大学学力検査

表 4 (1, 2) を表 8 に要約した。設置区分ならびに 1989 年と 90 年の比較から全体として次の点を指摘できる。

(1) 国立大に教科・科目数を減らす努力が見られるが、公立には変化は認められない。

(2) 国立の中で、(1) の程度は、新設>戦後立>戦前立の順に著しい。

(3) 89 年に比し 90 年に (1) の傾向が強くなったのは、新テスト (セ試) への移行を機に、各大学の学力検査についての見直しの結果と考えられる。

表 5-1 分離分割・推薦入学・帰国子女

		n	1984	1985・86	1987	1988	1989	1990	1991
分離分割	国立 公立	42 8	—	—	—	—	4 (9.5) 0	16 (38.1) 0	23 (54.8) 0
	計	50					4 (9.5)	16 (38.1)	23 (54.8)
推薦入学	国立	42	0	3 (7.1)	13 (31.0)	13 (31.0)	16 (38.1)	22 (57.4)	
	公立	8	0	0	0	0	0	0	
	私立	29	5 (17.2)	17 (58.6)	18 (62.0)	18 (62.0)	18 (62.0)	19 (65.5)	
	計	79	5	15	31	31	34	41	
帰国子女	国立	42	0	2 (4.8)	5 (11.9)	6 (14.3)	8 (19.0)	9 (21.4)	
	公立	8	0	0	0	0	0	0	
	私立	30	0	1 (3.4)	2校(慶応大, 東海大)で帰国子女受け入れ				
	計	80	0	3	5 (11.9)	6 (14.3)	8 (19.0)	9 (21.4)	

() は%, 空白は未調査もしくは未決定

参考文献 8) の表 5 に新聞ならびに参考文献 4) により追加して作成。

表 5-2 私立大推薦入学実施校

	1990	1989	1988	1987	1986
日大(付属高校)	○	○	○	○	○
東邦(付属高校)	○	○	○	○	○
東京	○				
東女	○	○	○	○	○
慶応(付属高校)	○	○	○	○	○
北里	○	○	○	○	○
杏林	○	○	○	○	○
川崎	○	○	○	○	○
聖マリ	○	○	○	○	○
帝京	○	○	○	○	○
藤田保衛	○	○	○	○	○
愛知	○	○	○	○	○
福岡(付属・一般)	◎	◎	◎	◎	◎
埼玉	○	○	○	○	○
金沢	○	○	○	○	○
独協	○	○	○	○	○
近畿	○	○	○	○	○
東海(付属高校)	○	○	○	○	○
産業	○	○	○	○	

(4) 国立42校中, 外国語, 数学, 理科を課さない大学がそれぞれ, 11(26.2%), 6(14.3%), 19(45.2%) に達した。

第2次(個別大)学力検査における教科数の変化を, 変り目を対象に表8にまとめてみた。全般的に左傾し, 減少している。私立では共通1次発

足の前年に4教科型から3教科型に, 国・公立は, 共通1次発足時に5教科型から4～3教科型と減少, 二次学力検査抜きも3校出現した。その後, 公・私立は, 殆んどが3教科型であるのとは異なり, 国立では85～89年の平均教科数がやや増加したが, 90年を機に2.2と減少, 2次学力検査抜きが4校となった。

私立医大における学科試験については年次的に大きな変化はない。ただ1990年より, 慶応大と産業医大(共1も課していた)がセ試をとり入れたことが特筆すべきことであろう。

教科数についてしてみると, 表4-3, 8のように英語, 数学, 理科(物理, 化学, 生物のうち2科目)の4教科を課す大学が圧倒的に多く, 23校にのぼっている。

数学を選択教科にして, 数学, 物理, 化学, 生物の中から2教科を課す大学は, 3校(独協, 金沢医, 愛知医)である。また帝京大のように, 英語, 国語, 数学, 物理, 化学, 生物の中から3教科を試験する大学もある。

国語, 社会を必須試験科目とする大学は, セ試に参加する慶応大, 産業医大以外1校もない。

教科の中の科目の詳細をみると, 表4-3に示すように, 各大学でかなりバラツキのあることがわかる。たとえば, 英語でもⅠ, ⅡB, ⅡCを課さない大学, 数学で微分・積分あるいは確率・統計

表 6 推薦入学実施概要 (大学別, 1990年度)⁴⁾

大学名	開始年	入学定員	募集人員	センター 試験	出願資格 (現役以外)	数/高校 制限	選考方法(調査書・推せん書 健診・センター試験 以外)
秋 田	'87	100	20人程度	○	A	2	小論文・面接・志願理由書
山 形	'87	100	約30人	—	A		面接・小論文
筑 波	'90	100	約20%	—	A I B 資格		1次: 書類 2次: 面接・小論文
群 馬	'87	100	約30%	—	① 科目	3	書類選考, 小論文・面接
新 潟	'90	100	20%程度	○	①, A		1次: 書類+センターテスト→3倍に 2次: 面接
富 山	'89	100	約20人	—	①, A 科目		1次: 書類(含志望理由書) 2次: 小論文・面接
岐 阜	'90	80	5人以下	○	①	2	1次: 書類(含志望理由書) 2次: 小論文・面接
浜 松	'90	80	20人以下	—	能力・科目		1次: 書類 2次: 小論文・面接
名古屋	'87	100	約20人	○	①	2	志望理由書・面接
三 重	'89	100	20人以内	○		2	志望理由書・面接
滋 賀	'89	100	約15人	○		3	1次: 書類+センターテスト 2次: 小論文・面接
鳥 取	'87	100	約10人	○	科 目	2	面接
島 根	'87	100	約30人	—	科 目	3	1次: 書類 2次: 面接・小論文
山 口	'87	100	20%程度	○	①, A, 準Aで 特定科目特優	1	1次: 書類 2次: 面接・小論文
香 川	'87	100	約20人	—	① 科目		1次: 書類 2次: 面接・小論文
愛 媛	'85	100	30人以内	○	A	3	1次: 面接・小論文・書類 2次: センター試験
高 知	'87	100	約20人	○	A 科目	2	小論文・面接
佐 賀	'85	100	30人以内	—	① 科目	1	1次: 書類 2次: 小論文・面接
長 崎	'90	100	20人程度	○	科目		面接
熊 本	'90	100	10人以内	○	A	2	面接
大 分	'85	100	約20人	○	A, ① 科目	2	1次: 書類 2次: 面接
琉 球	'87	100	30人以内	○	①		面接・小論文

を課さない大学など、まちまちである。これが医学部受験をめざして高校教育でどのように指導されてきたか、また、私立医大の志願者数にどう影響しているのか、さらに、こうした試験科目の選定が入学後にどう影響しているのか、今後検討すべき課題といえよう。

7) 小論文・面接・適性検査

学業到達度以外の能力や人物を測るものとしての小論文・面接・適性検査の年次推移⁷⁾を表9に示す。国立では小論文実施率が、分割部分での実施を含めると52.4%に、面接実施率は、分割や推薦入学を含めずとも54.8%、それらを含めると実

に83.3%に達し、面接実施率が一時低下していた公立大においても、90年度に62.5%と最高となった。

私立大では表4-3のごとく小論文は1990年度では29校中27校(93.1%)と多くの大学で実施しており、そのうち10校(37.0%)では、一次試験で受験者全員に課している。小論文を行っていない2校はいずれも新設校である。

面接についても表4-3に見られるように27校で実施している。なお面接を実施していない2校も、小論文は行っており、すべての大学で面接、小論文のいずれかは実施していることになる。一

表 7 推薦入学—国立22大学の選抜概要⁴⁾

①開始校(累積)数	3	10(13)	3(16)	6(22)
年度	1985	87	89	1990
校数		3	11	1 30
②募集人員	入学定員に 対する%	0 5 10 15 20 25 30		
③センター試験を	課す: 14	課さぬ: 8		
④出願資格	全大学が現役			
評定平均	④: 6 ⑤, A: 4			
	A: 6 なし: 6			
科目等(履修, セ試験など)指定	12			
国際バカロレア資格	1			
⑤1 高校からの推薦人数の制限	3名: 4, 2名: 8, 1名: 3, なし: 7			
⑥選抜方法	調査書・推薦書・健康診断: 全大学			
	1次を書類で: 9, 1次を面・小・書類(2次を セ試): 1, 1次を書類+セ試(2次を面・小): 2, 面接: 全22大学, 小論文: 14, 志望理由書: 14			

次試験で面接を行っている大学は5校(17.2%)
ある。

小論文, 面接試験を一次試験で行っている大学
が, その評価点をどのように学科試験と組み合わ
せているかは不明である。

適性検査を行っている大学は表4-3のように
8校(27.6%)で, 旧設校, 新設校いずれも4校ず
つである。その他, 心理テスト, 性格調査を行う
ところもある(各1校ずつ)。

適性検査の中, Skills Analysis²⁾とは, 米国の
new MCAT の一部で, 文章・数量資料をもと
に, 解析, 推論, 立案能力(臨床能力に通じる)
などを客観的採点方式により測るもので, 福岡大
で1981年, 信州大学で1989年より, 選抜に採用さ
れ, 医学教育振興財団ならびに科研・特定研究班
で鋭意研究・開発が進められている。

8) 1次(共1・セ試)+2次(個大試)の配点 比率(表4-1, 2)

国・公立大の連続方式(A・B日程)および分
割の前期における比率について表4から見ると,
東大と京大が1:4と2次重視を継続している。
それら以外はほぼ1:1前後であるが, 新国立の
中に約2:1と1次重視型がやや目立つ。

表 8 第2次(個別大学)学力検査の教科数
の年次推移

年度	設置別	n	0	1	2	3	4	5	平均
1975	国	33					2	31	4.9
	公	8					3	5	4.6
	私	28				2	25	1	4.0
1978	国	38				1	4	33	4.8
	公	8					3	5	4.6
	私	28				24	3	1	3.2
1979	国	38	3		18	16	1		2.3
	公	8			4	4			2.5
1980	私	29				27	2		3.1
1985.6	国	42	2	1	7	31	1		2.7
	公	8				8			3
	私	29		1		28			2.9
1987.8	国	42	2	1	10	27	2		2.6
	公	8				8			3
	私	29	—	—	6	23	—	—	2.8
1989	国	42	3	1	9	27	2		2.6
	公	8				8			3
	私	29	—	—	6	23	—	—	2.8
1990	国	42	4	3	19	14	2		2.2
	公	8				8			3
	私	29	—	—	6	23	—	—	2.8

参考文献8)の表4に1990年分を本論文資料で追加。

分割後期に関してはこの比率がかなり多様化し
ている。それはすでに示したように後期の選抜方
法の多様化, とくに学力検査の廃止や軽減に基因
している。北大や東大のように, 総合問題を課
し, 前者ではセ試抜きで総合問題のみで判定, 後
者では総合問題と面接で総合判定をするといった
具合に, 旧帝大においても変化が見られる。後期
で学科試験抜きの場合, 小論文がある場合, セ試
との比率を前期と同様に公表している(群馬, 大
阪, 神戸, 鳥取)場合もあるが, 面接のみの場
合は, 比率を出し得ないのは当然である。

9) 調査書

今回調査書評価の実態に関しては, すでに述べ
た推薦入学以外にデータを持ち合わない。ある
学力レベル以上なら調査書の評定平均値の平均に
は, 入試学力検査成績よりも入学後の成績との相
関度が高いことは多くの研究で明らかとされてい

表 9 小論文・面接・適性検査実施の年次推移^{8,4)}

		1978	1979	1980	1981	1985	1986	1989	含分割	1990	含分割＋ 推薦入学
小論文	国立 (%)	2/38 (5.3)	15/38 (39.5)	17/41 (41.5)	17/42 (40.5)	16/42 (38.1)	16/42 (38.1)	16/42 (38.1)	18/42 (42.9)	16/42 (38.1)	22/42(分:6) (52.4)
	公立	2/8 (25.0)	5/8 (62.5)	5/8 (62.5)	5/8 (62.5)	2/8 (25.0)	2/8 (25.0)	2/8 (25.0)	2/8 (25.0)	2/8 (25.0)	—
	私立	20/28 (71.4)		24/28 (85.7)	26/29 (89.7)	28/29 (96.5)	未調査			27/29 (93.1)	
面接	国立	1/38 (2.6)	13/38 (34.2)	16/41 (39.1)	18/42 (42.9)	19/42 (45.2)	21/42 (50.0)	23/42 (54.8)	25/42 (59.5)	23/42 (54.8)	35/42(分:9) (83.3)
	公立	3/8 (37.5)	4/8 (50.0)	4/8 (50.0)	4/8 (50.0)	3/8 (37.5)	3/8 (37.5)	5/8 (62.5)	5/8 (62.5)	5/8 (62.5)	—
	私立	26/28 (92.9)	26/28 (92.9)	26/28 (92.9)	26/29 (89.7)	26/29 (89.7)	未調査			27/29 (93.1)	
適性検査*	国立							1/42 (2.4)		1/42 (2.4)	
	私立	3/28 (10.7)			10/29 (34.5)	12/29 (41.4)	未調査			10/29 (34.5)	

* 心理テスト、性格調査、Skills Analysis などを含む。参考文献 8) に追加。

る。したがって、セ試のあるレベル以上の受験者を対象として調査書を実質評価することが望ましい。面接時に、人物や行動の記録が活用されていることは、面接実施の普及と共に一般化していると思われる。

10) 総合評価一合否判定

表 4-1, 2 から、一部で、総合評価あるいは段階評価なる言葉が公表されていることが判る。分割後期や推薦入学における学科試験抜きの場合に、高校調査書、セ試、小論文、面接、適性試験など、多元的要素を資料として、総合的ないし段階的に評価し合否を決定するという望ましい方式（医学教育学会提案）が採用されていると推測される。しかし実態把握は不可能である。

11) 新パターン校の年次推移

国・公立大設置時期と選抜における新パターン（二次・個大試験において、学力検査の有無にかかわらず、面接・小論文の両者もしくは一つを実施している大学）校の推移を表10に示す。このパターンは明らかに設置時期の新しい大学が先行していることが判る。しかし本白書の対象期間に、名古屋大学を皮切りに、旧帝大が新パターンに参入したことは、選抜改善の歩みの中で特記すべき

ことである。分割後期や推薦入学の少人数を対象に得られた学力以外の適性を見る体験が、一般入学や分割前期の改善に生かされることを期待する。逆から見れば、それらの方法による選抜体験を全く持たない大学、つまり学力試験のみに依存している大学は、国立42校の中10校（23.8%）と1/4を割り、また公立8校中3校（37.5%）と減少した。私立は1980年において100%新パターン化していた。

4. 入学者の内訳

1) 現役・浪人

大学当たりの平均人数を設置区分・年度別に表11に示す⁵⁾。現役について見ると、前回白書の対象期間を通して、国立旧2期は同1期に比し低値であった。今回は戦後立が、戦前立ならびに新設に比し、若干低い。しかし入学定員（数%少ない）によって補正すれば、その差はわずかであり、割合で見ると、国立3群間の差は縮小している。しかし公立の現役は、入学定員の平均（国立の約80%）で補正しても国立のそれに比し低い。

私立は設置区分別でみていないが、現役は1986年、1987年では、全入学者の約半数を占めていた

表 10 国・公立大設置時期と新パターンの年次推移^{8,4)}

	n	1979	1980	1986	1989	含分割	1990	含分割・推薦
旧 帝	7	0 (0%)	0 (0)	1 (14.3)	1 (14.3)	2 (28.6)	1 (14.3)	3 (42.9)
旧 六	6	3 (50.0)	2 (33.3)	2 (33.3)	2 (33.3)	—	2 (33.3)	3 (50.0)
新	12	5 (41.7)	6 (50.0)	6 (50.0)	7 (58.3)	9 (75.0)	7 (58.3)	9 (75.0)
新 新	13 ↓ 17	11/13 (84.6)	17/17 (100)	17 (100)	17 (100)	—	17 (100)	17 (100)
計	38 ↓ 42	19/38 (50)	25/42 (59.5)	26/42 (61.9)	27/42 (64.3)	30/42 (71.4)	27/42 (64.3)	32/42 (76.1)
公 立	8	5 (62.5)	5 (62.5)	5 (62.5)	5 (62.5)	—	5 (62.5)	—

参考文献 8) の表 2 に追加。

表 11 入学者の内訳—現役・浪人の平均人数／大学（設置区分・年度別）⁵⁾

		1985*2	1986	1987	1988	1989
現 役	戦前立 国立 戦後立 新 設	旧 1 期 40.7 旧 2 期 28.8	43.6 39.1 39.6	47.0 42.5 46.1	46.0 39.2 46.1	42.3 37.0 40.6
	公 立	25.6	27.4	33.0	28.3	29.6
	私 立	45.5	50.8	51.7	48.2	43.5
1 浪	戦前立 国立 戦後立 新 設	旧 1 期 37.2 旧 2 期 36.3	35.0 34.8 29.5	39.2 34.4 28.7	37.0 32.9 28.0	36.3 35.2 31.1
	公 立	32.6	27.5	29.9	33.1	33.0
	私 立	32.7	29.0	32.1	31.9	31.2
2 浪	戦前立 国立 戦後立 新 設	旧 1 期 15.3 旧 2 期 17.6	15.8 15.4 14.6	12.9 12.4 11.6	14.0 13.0 11.5	12.0 10.9 11.6
	公 立	11.3	15.1	9.6	10.6	10.6
	私 立	14.4	14.3	12.3	15.7	13.9
3 浪以上*1	戦前立 国立 戦後立 新 設	旧 1 期 12.1 旧 2 期 15.5	14.4 12.3 13.5	10.0 8.3 10.5	9.8 11.3 10.0	9.7 8.3 11.9
	公 立	9.3	9.6	7.8	6.5	6.6
	私 立	10.2	9.7	7.9	7.3	10.2

*1: 学士を含まない。 *2: 前回白書より。

表 12-1 入学定員に対する現役入学者割合(%)—高率校・低率校リスト⁵⁾

		1986		1987		1988		1989	
国 立	戦前立 (13)	岡 山	54.2	東 京	55.6	名古屋	57.0	名古屋	59.0
				名古屋	55.0	京 都	56.7	京 都	56.7
				九 州	52.5	東 京	52.2	東 京	52.2
				金 沢	50.1	熊 本	50.0	熊 本	52.0
		北海道	26.7	東 北	29.1	千 葉	22.0	北海道	30.0
				北海道	28.3			千 葉	25.0
	戦後立 (12)			群 馬	63.0	群 馬	60.0	群 馬	65.0
		三 重	28.0	信 州	28.0	信 州	29.0	広 島	26.0
		弘 前	26.7	弘 前	23.3	鹿児島	29.0	鹿児島	26.0
		信 州	22.0					弘 前	24.0
		東医歯	20.0						
	新 設 (17)	筑 波	71	筑 波	69.0	佐 賀	75.0	筑 波	62.0
		愛 媛	56	佐 賀	68.0	筑 波	61.0	佐 賀	56.0
		島 根	54	島 根	55.0	山 形	60.0	大 分	56.0
		浜 松	50	香 川	52.0	宮 崎	54.0	愛 媛	50.0
		佐 賀	50	愛 媛	51.0	大 分	52.0		
				山 形	50.0	愛 媛	51.0		
		琉 球	30.0	旭 川	30.0	旭 川	30.0	旭 川	27.0
		香 川	29.0	秋 田	29.0	山 梨	25.0	山 梨	26.0
		山 形	23.3	滋 賀	25.0				
		滋 賀	22.0	山 梨	20.0				
公 立 (8)		京 都	49	札 幌	52.0	京 都	45.0	京 都	50.0
		札 幌	40	京 都	46.0	札 幌	40.0	札 幌	39.0
		奈 良	25.0	奈 良	30.0	大 阪	17.5	奈 良	26.0
		大 阪	18.8	福 島	25.0	福 島	17.5	福 島	16.3

のに対し、年々その割合が減っていく傾向がみられる。その分浪人がふえていくことになるが、1浪は約30%、2浪は14~15%、3浪以上も約1割近くが入学していることがわかる。

設置区分の平均では上記のように、それ程大きな差が見られないので、各大学ごとに、入学定員で補正した現役の%を算出し、50%以上と30%以下の大学を各設置区分・年度ごとと列挙したのが表12-1である。公立は上位・下位各2校とした。そうすると各区分の中で、大学間かなりの差が見られ、それがほぼ定着し、一定の傾向を形成している場合が少なくない。その大学の特性によるほか、選抜方法にもよると見られる。

たとえば、名大、群馬は推薦入学を導入した年から恒常的に高率となっている。新設では、共通

1次開始後引き続き第2次試験を面接・小論文で実施している筑波と佐賀が上位1、2位を占めていることは注目に値する。また上位校の中には、愛媛、大分、佐賀（いずれも1985年から）、山形、島根、香川（87年から）のごとく、比較的早く推薦入学を開始した大学が多い。公立では、札幌と京都が4年間とも上位2つを独占していることは、それなりの要因があると思われる。

私立医大の場合には現役入学者の割合は、入学定員に対してでなく、実際の入学者数に対してみる必要がある。それは私立の場合、入学者数と定員とが異なるからである。

表12-2に示すように、現役率の低い大学は常に低く、旧設では岩手医大（26.3~43.8%）、日本医大（18.1~29.0%）、昭和大（24.8~31.3%）、

表 12-2 入学者数に対する現役入学者割合—私立医大⁵⁾

大学名		1986	1987	1988	1989	大学名		1986	1987	1988	1989
旧 設 (13)	岩 手	31.2	43.8	26.3	27.5	新 設 (16)	自 治	66.7	63.7	66.0	68.0
	日 大	48.3	56.9	46.3	43.6		独 協	58.2	55.0	48.0	53.0
	日 本	19.6	18.1	22.5	29.0		埼 玉	33.7	45.6	54.8	43.7
	東 邦	64.0	47.1	40.0	52.0		杏 林	60.8	56.3	52.2	40.0
	東 京	43.8	35.8	35.8	32.7		帝 京	47.2	52.2	42.6	39.4
	東 女	65.3	63.1	66.0	68.0		北 里	43.3	48.3	41.7	36.7
	慈 恵	49.5	52.1	39.2	40.0		聖マリ	64.4	52.2	53.3	51.0
	慶 応	63.5	56.9	55.0	62.7		東 海	46.5	46.2	44.8	32.2
	昭 和	24.8	32.5	31.7	31.3		金 沢	38.5	45.5	44.6	43.0
	順天堂	52.2	37.8	43.1	40.0		藤田保衛	56.4	57.5	60.4	53.0
	大 阪	32.3	31.4	27.0	23.3		愛 知	59.8	66.0	64.0	55.0
	関 西	37.5	37.0	23.0	27.0		近 畿	51.4	62.0	49.5	47.4
	久留米	45.9	44.6	35.0	33.6		兵 庫	46.7	46.0	31.7	31.0
							川 崎	66.6	80.0	63.8	66.3
							産 業	27.5	21.6	40.0	33.0
							福 岡	44.8	39.8	51.2	41.2

表 13 女子学生の人数／大学の設置区分平均の推移⁵⁾

		n	1979	1985	1986	1987	1988	1989
国 立	戦前立	13	旧 1 期 9.9	旧 1 期 18.4	14.0	17.4	14.8	14.6
	戦後立	12	旧 2 期 11.7	旧 2 期 17.3	19.3	24.2	21.8	23.9
	新 設	17			21.3	27.8	30.1	29.3
	平 均	42	10.8	17.9	18.5	23.6	23.0	23.2
公 立		8	13.1	16.4	17.4	17.5	14.7	19.6
私 立		29	21.2	24.8	23.8	27.4	28.1	27.3
総平均		79	14.9	20.3	19.9	22.8	21.9	23.4

注 1 各大学の入学定員の平均が期間中に約110から100に漸減しているの、89年度は%と同値であるが、始めの方は%より、少し高い値が出ている。

2 東京女子医大を含む。

大阪医大（23.3～32.3%）などでみられる。新設では一般に現役の入学率は高い。現役の入学率が低い理由の分析は大変難しいが、旧設で低い理由の1つに、現役の合格者はかけ持ち受験で他へ流れることが推測され、今年こそはと満を持した浪人生の入学が多くなるものと思われる。

2) 女子学生

大学当りの女子学生数を設置区分ごとに平均した結果を表13に示す。対象期間中にも漸増、設置区分的には私立>国立>公立の順に高く、この傾

向は前回と同様である。しかし10年前に比べると約10倍となり、女子医学生が約1/4に達した。

3) 学 士

大学当りの学士数を設置区分ごとに平均した結果を、表14に示す。対象期間中、年度により多少の高低はあるが、国立は約5%、公立は約4.5%、私立は約2.3%とほぼ横這い状態で、10年前に比べると若干減少した。

4) 外国人留学生（特別枠）

大学当たりの人数の設置区分別平均の推移を表

表 14 学士数／大学の設置区分別平均の推移⁵⁾

		n	1977	1979	1985	1986	1987	1988	1989
国 立	戦前立	13	旧 1 期 6.5	旧 1 期 6.9	旧 1 期 4.9	4.5	5.0	4.3	4.3
	戦後立	12	旧 2 期 6.3	旧 2 期 8.2	旧 2 期 4.8	5.1	6.4	5.0	5.3
	新 設	17				5.0	6.8	5.9	6.0
	平 均	42	6.4	7.6	4.9	4.9	6.1	5.1	5.3
公 立		8	11.0	7.1	5.7	4.4	2.8	4.6	4.0
私 立		29	2.6	2.8	1.7	1.9	2.5	2.7	2.3
総平均		79	5.5	6.0	3.8				

注：各大学の入学定員の平均が期間中、約110から100に漸減しているの、89年度は%と同値であるが、始めの方は%より少し高い値が出ている。

表 15 特別枠外国人留学生／大学の設置区分別平均の推移⁵⁾

		n	1977	1979	1985	1986	1987	1988	1989
国 立	戦前立	13	旧 1 期 0.7	旧 1 期 1.2	旧 1 期 0.9	0.8	0.8	0.6	0.4
	戦後立	12	旧 2 期 1.7	旧 2 期 0.8	旧 2 期 0.1	0.2	0.2	0	0.3
	新 設	17				0.1	0.2	0.3	0.3
	平 均	42	1.2	1.0	0.5	0.3	0.4	0.3	0.3
公 立		8	1.8	0.8	0	0	0	0	0
私 立		29	0.7	1.2	0.4	0.07	0.03	0.4	0.3
総平均		79	1.1	1.1	0.4	0.1	0.2	0.2	0.2

注：各大学の入学定員の平均が期間中、約110から100に漸減しているの、89年度は%と同値であるが、始めの方は%より少し高い値が出ている。

15に示した。国立で見ると、1977～79年時の1/3～1/4に減少し、公立では1985年以来0であることは、予想外であり、国際化が叫ばれている中で問題である。外国人留学生は卒後レベルで急増しているが、卒前では逆に減少していることが判明した。

私立医大では外国人に特別枠を設けている大学は極めて少ない。1987年から藤田保衛が3、1988年から関西医大が3名を設けた。

5. 医系入学者選抜に関する討議会^{9,10,11)}

医学校における入学者選抜の改善を目的として1975年に設置された選抜検討委員会が、1977年に、第1回拡大選抜検討委員会と称し、第2次試

験を学科試験抜きで実施する大学関係者を対象に実施したのが始まりである。1982年迄に4回実施され、本白書対象期間は86～89年と毎年開催された。その概要を表16に示す。

この討議会は第4回から全医学関係者に open となった。以来、国公立の約7割の大学からの参加者があり、選抜改善に腰の重かった旧帝大からの参加も多くなった。全国立大学にある入学者選抜方法研究委員の連絡協議会は、国立大のみから成り、全学部から at random の参加者ということで、同じく年1回開催されているが、医学系への feedback が大きくない。それに比べ、この討議会は選抜の knowhow を知り、情報を交換する場として果している役割は非常に大きいと思わ

表 16 医系入学者選抜に関する討議会^{9,10,11)}

回	第 5 回 (1986)	第 6 回 (1987)	第 7 回 (1988)	第 8 回 (1989)
日 時	1986. 9. 6 (土) 9:15~16:15	1987. 9. 12 (土) 9:30~17:00	1988. 9. 10 (土) 10:00~17:00	1989. 9. 9 (土) 10:00~16:00
場 所	東京ガーデンパレス (旧湯島会館)	東京竹橋会館	東京慈恵会医科大学 高木会館 B 会議室	東京野口英世記念会館
世話人	織畑委員長 尾島委員	織畑委員長 中川米造・尾島委員	橋本委員長・桜井副委 員長・尾島委員	橋本委員長・桜井副委 員長・尾島委員
参加 委員 機関数 非委員	8→41 (旧帝大 5)	8→40 (旧帝大 5)	7+病院 2→57 (旧帝大 5)	7+厚生省+2 高校 →55 (旧帝大 6)
参加者数 委 員 非委員	8 } 64 54 } 2 病院	8 } 68 60 } (内自治医大11)	7 } 79 72 } 2 病院 1 大学入試センター } 82	8 } 72 64 } 1 厚生省 2 高校 } 75
話 題	1 面接 (名大) 2 小論文 (信大) 3 適性検査 (福大) 4 総合 (合否) 判定 (日大) 各セッションごと に話題提供と 討議	1 ワークショップ「入 学者選抜のあり方」 オリエンテーション と 3 スモールグル ープ討議 2 推薦入学 A 国立大:名古屋, 佐賀, 大分, 愛媛 B 私立大:自治, 慶応, 日大, 女子医大 報告と討議	1 最近の医学部志願 者の減少について 国公立大・私立大 2 「新テスト」(入試 センター) 3 これからの入試改 革に向けて 旭川, 東北, 香川, 慶応, 聖マリ, 関 西 話題提供と討議	1 「面接試験」 方法と評価 信州大, 山梨医大, 聖マリ 2 「高校 vs 大学」 調査を含めて 都立日比谷高校, 茨城水戸一高, 秋田大, 名古屋市大, 順天堂大 話題提供と討議
ポストアンケート	○	—	—	○
懇親会	○	○	○	—
記 録	文献 9)	文献 9)	文献 10)	文献 11)

れる。

おわりに

はじめにものべたように、この白書の対象期間は、1979年の共通 1 次試験発足時に匹敵する変動期であったといえよう。しかしその中に芽生えて来た選抜方法の多様化→学力以外の適性も測ろうというムードが、変革に腰の重かった古い大学をも動かしている点は、共通 1 次の時点以上に望ましい方向への動きと評価できる。この方向が、次の 4 年間、さらに拡大・深化することが望まれる。この 4 年の問題点の 1 つとして、特別枠外国人留学生の比率が以前に比べ減ったことを指摘しておく。

謝辞：全国医部学長病院長会議発行「カリキュラムの現状1990」のゲラ段階資料をご提供下さった東京女子医科大耳鼻科石井哲夫教授と同教室関係者、資料の

整理に協力下さった岐阜大医学部第 2 病理窪田瑛子さん、ならびに慈恵医大第 3 内科田代佑子さんの労に感謝します。

文 献

- 1) 日本医学教育学会選抜検討委員会(尾島昭次・他): 医学部・医科大学における入学選抜方法—とくに共通第一次試験と関連して、医学教育, 8: 131, 1977.
- 2) 西園昌久: 新しいテスト New MCAT Skills Analysis Test (特集/入学選抜—変動とさらなる改善へ)。医学教育, 20: 116, 1989.
- 3) 尾島昭次, 堀 原一: 大学医学部・医科大学。医学教育白書。6 頁, 篠原出版, 1986.
- 4) 国大協公大協・大学入試センター: 国公立大学ハンドブック (昭和62, 63, 64, 平成 2 年度版) 第一法規出版, 1987, 88, 89, 90.
- 5) 全国医学部長病院長会議: 医学教育カリキュラムの現状, 昭和50, 52, 54, 56, 58, 60, 62, 平成元年版。
- 6) 織畑秀夫, 尾島昭次: 入学選抜。医学教育白書。

- 16頁, 篠原出版, 1986.
- 7) 尾島昭次: 医学志願倍率の変動—国立大学. 医学教育 **20**: 70, 1987.
 - 8) 尾島昭次: 共通1次発足より10年を経て. 全医学
校および岐阜大学医学部. 医学教育, **20**: 74, 1989.
 - 9) 尾島昭次, 織畑秀夫, 橋本信也, 堀 原一: 入学
者選抜に関する討議会; 日本の医学教育 (1969～
1988). 日本医学教育学会—篠原出版, 89頁, 1989.
 - 10) 日本医学教育学会選抜委員会: 入学者選抜に關す
る討議会報告. 医学教育, **18**: 489, 1987(第5回),
20: 201, 1987 (第7回).
 - 11) 日本医学教育学会選抜検討委員会: 第8回入学者
選抜に 關する 討議会報告, 医学教育, **21**: 275,
1990.

* * *